

『#マッドマックス (Mad Max)』(ジョージ・ミラー監督、1979年)をNHK BSで視聴した。先日読んだ『シン・アナキズム：世直し思想家列伝』の政治思想史・社会思想史が専門の著者重田園江氏が絶賛していたので観ることにした。主演のメル・ギブソンとジョージ・ミラー監督の出世作となったオーストラリア製バイオレンスアクション。後にシリーズ化され、特殊撮影や舞台設定など、国内外の多くの作品に影響を与えた。

暴走族による凶悪事件が多発する社会となった近未来の荒廃したオーストラリアの路上が舞台になる。凶悪な暴走族に妻子を奪われた警官の復讐劇を描く。暴走族による殺人が横行する荒廃した近未来。凶悪犯ナイトライダーは暴走族追跡用のパトカー「インターセプター」を警察から奪って逃走するが、敏腕警官マックスに追い詰められ事故死する。ナイトライダーの友人 T 率いる暴走族は、報復のためマックスの同僚 G を追い詰める。そして車が横転して G が閉じ込められたところを、その車に火をつけて殺害する。マックスはこの事件をきっかけに引退を決意し、家族と休養の旅に出る。しかし旅先で T の手下に愛する妻子を奪われ、復讐を果たすべくたった 1 人で壮絶な闘いに身を投じていく。

私には本作は、勧善懲悪や復讐劇に見えた。しかし重田園江氏が評価するように「アナーキーな秩序の再編」という思想史的な側面もあるのだろう。狂気の暴力と支配に対して、弱者や抑圧された人々が立ち上がる物語でもある。マックス自身は喪失と復讐に突き動かされるが、物語の中心は「共同体の再生」に移っていく面もあるようだ。

本作を視聴して、「9.11 とアフガン侵攻」とを連想したのだが。テロによる衝撃と、それに対する軍事的報復は、「正義の名の下の復讐」という構造を持つ。米国は「自由と正義 vs テロリズム」という二項対立を掲げ、世界を巻き込む物語を作った。これは映画的な勧善懲悪の枠組みに近い。しかし現実では「悪」とされた側にも複雑な歴史的背景があり、単純な勧善懲悪では語れない。ここに映画と現実のズレが生じる。

本作を絶賛するのは、単なる娯楽映画としてではなく「秩序が崩壊した世界で、人々がどのように新しい共同体を作り直すか」という思想史的問いを映し出しているからであろう。深読みすれば、復讐や勧善懲悪を超えて「社会の再編」、「権力の転覆」、「生存のための連帯」が描かれるとも言える。これはアナーキズム的な「国家や権力の外での秩序形成」と響き合う。

本作を「復讐の物語」と受け取るのか、それとも「共同体の再生」と読み解くのか。様々な解釈ができるところが名作と言える所以かもしれない。

評価：★★★★☆